

京都大学	博士 (総合学術)	氏名	鶴羽 愛里
論文題目	高齢者にとっての世代間交流の意味—エイジング・パラドックスに着目して—		
(論文内容の要旨)			
<p>超高齢社会において、高齢者の社会的孤立・孤独感が重要な社会課題の1つとして認識されている。孤立・孤独の解決策の1つとして、世代間交流が注目されている。本研究は、高齢者にとって世代間交流がどのような意味を持つのかを明らかにすることを目的とした。</p> <p>第1章では、高齢者研究におけるエイジング・パラドックスに着目し、関連する先行研究を概説した。エイジング・パラドックスとは、高齢期において親しい他者の喪失経験や身体・認知機能の低下などのネガティブな事象が増加するにも関わらず、主観的幸福感維持される現象である。主観的幸福感には、経済的、健康的な側面に加えて、人間関係の側面も重要であるとされる。高齢者の人間関係の中でも若齢者との関わりは、次世代を確立させて導くことへの関心である世代継承性と関連することが知られる。一方で、認知機能の1つである記憶は、加齢の影響を受けるが、高齢者にとって同世代や異世代に関する記憶の脳内基盤の違いについては、明らかになっていない。</p> <p>第2章では、同世代と異世代を、内集団と外集団ととらえ、内集団と外集団の他者との社会的相互作用によって記銘された記憶の想起に関連する神経メカニズムとその加齢変化を明らかにすることを目的とした。磁気共鳴機能画像法 (functional magnetic resonance imaging, fMRI) を用いて、健常若年成人と健常高齢者各 36 名に対して、2 日間の認知神経科学実験を実施した。行動データから記憶成績、fMRI データから脳賦活と脳機能的結合が解析された。異世代条件では、記憶成績、脳賦活、脳機能的結合のいずれにおいても加齢による低下が認められた。加齢による低下が認められたのは、記銘時に単語をやり取りした異世代の人物を正しく想起した試行数、海馬と人物に関する社会的知識の処理に重要な右前部側頭葉領域の賦活量、右前部側頭葉領域と他者に対する社会的認知を反映する右上側頭溝後部領域との間の機能的結合においてであった。一方で、同世代条件では、加齢による低下は認められなかった。これらのことから、情報源を想起する際、情報源が異世代の方が同世代よりも加齢による低下が起きやすいことが示唆された。また、脳・認知機能の低下にもかかわらず質問紙で測った主観的幸福感維持されており、エイジング・パラドックスに沿う結果であった。</p> <p>第3章では、高齢者の主観的幸福感に関連する心理行動要因を明らかにすることを目的とした。高齢者の主観的幸福感は、次世代を確立させて導くことへの関心である世代継承性と関連することが知られるが、世代別の交流頻度や困難時の適応方略との関係を高齢者で調べた研究はない。主観的幸福感には、世代継承性および若い世代との交流頻度が関係することを主仮説とし、主観的幸福感に関連が予想される他の要因 (主観的経済状況、主観的健康状態、コーピング・スタイル (肯定的解釈・気晴らし)) を含め、100 名の健常高齢者に質問紙調査を実施した。主観的幸福感の予測要因を重回帰分析にて検討した結果、高齢者の主観的幸</p>			

幸福感を予測する心理行動要因として、世代継承性だけでなく、異世代との交流頻度、肯定的解釈のコピーング・スタイルも重要であることが示唆された。

第4章では、長期的な世代間交流である異世代ホームシェアを通じた学び合いが、孤立・孤独の解決策となりうる可能性について検討することを目的とした。本章は、日本ホームシェア会議事務局と京都大学大学院総合生存学館（共同開催）および京都府建設交通部住宅課・京都市都市計画局住宅室住宅政策課（協力）のもと実施した **Project Based Research (PBR)** に基づく。共同討議により、異世代ホームシェアは、高齢者とより若い世代との学び合いを通じて、社会的孤立・孤独解決の解決に資する可能性が示された。

第5章では、得られた知見から、高齢者にとっての世代間交流の意味を多角的に検討した。高齢者において、異世代条件では、記憶成績、脳賦活、脳機能的結合のいずれにおいても加齢による低下が認められたが、主観的幸福感が維持されたことは、エイジング・パラドックスに沿う結果であった。この加齢依存的な特徴について互いに理解しコミュニケーションをとることが重要となる。加えて、主観的幸福感の向上には、世代間交流の有無だけではなくその頻度も重要であることから、定期的な世代間交流が望まれる。また、社会実装の観点から、孤立・孤独対策として、異世代ホームシェアは、高齢者だけでなく、次世代や地域社会に対してもポジティブな影響をもたらす可能性が示された。本研究で得られた知見は、孤立・孤独の解決および、主観的幸福感のより高い超高齢社会の実現に向けて示唆を与えるものである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、世界規模で進行する人口の高齢化に関して、特に我が国において顕著な高齢者の社会的孤立・孤独感という社会課題の解決策として、世代間交流に着目し、その有用性や導入に伴う問題点などを、認知神経科学実験や心理調査、および異世代共住という社会実装の観点から、多角的に検討した研究である。その際、高齢者研究で指摘されているエイジング・パラドックスを理論的枠組みとしつつ、実証的なデータでの肉付けによって新たな知見を提供したことは、学術的にも高く評価される。

エイジング・パラドックスとは、高齢期において親しい他者の喪失経験や身体・認知機能の低下などのネガティブな事象が増加するにも関わらず、主観的幸福感維持される現象である。第1章でこうした概念を整理したのち、第2章では世代間交流を模した社会的相互作用後の偶発的な記憶成績を高齢者と若齢者で測定し、また、記憶想起時の脳活動をfMRI (functional Magnetic Resonance Imaging) で計測した。その結果、同世代が情報源であった情報の想起に関しては高齢者と若齢者で行動的にも神経基盤においても違いがなかったが、異世代が情報源であった情報の想起に関しては、高齢者で情報源想起の不正確さやそれに関連すると思われる脳賦活低下や脳機能結合の低下が見られた。こうした加齢依存的な処理の特徴の意味するところは明らかではないが、高齢者-若齢者間の世代間交流の神経基盤を調べた研究には新規性があり、学術的にも高く評価される。

第3章では、高齢者の主観的幸福感に関連する心理行動要因を調べ、特に、異世代との交流頻度が主観的幸福感を高めるのではないかという仮説を検証しようとした。その結果、高齢者の主観的幸福感を予測する心理行動要因として、従来言われていた世代継承性、すなわち次世代を確立させて導くことへの関心だけでなく、異世代との交流頻度を月1回以上持つことも高齢者の主観的幸福感を有意に予測することが確認できた。社会的交流が高齢者の主観的幸福感にとって重要であることは従来から言われていたが、より若い世代との交流が特に重要であることを明らかにした点は、学術的にも政策への示唆という点でも、高く評価される。このことは、第4章で取り上げた異世代共住というホームシェア事業の意義の裏付けを提供する知見である。

一方で、一部の章の間には十分な関係性が説明されていない点が散見された。加えて、本論文の出発点となった高齢者の孤独感の低減については、主観的幸福感が孤独感の逆の作用を持つと考えれば一定の答えを提出していると解釈することが可能ではあるものの、孤独感の直接的な測定が実現しなかった点において、今後の更なる研究が必要である。しかし、これらは本論文の価値を損なうものではなく、さらなる研究発展のための課題とされるべきであろう。

よって、本論文は博士(総合学術)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約した

ものとすることを認める。

要旨公表可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降